

狂言における待遇表現の一考察*

——卑罵語としての「喰ふ」について——

深 井 一 郎

はじめに

「待遇表現」という語について、辻村氏はさきに「敬語の史的研究」において「待遇表現とは話し手・聞き手・素材の三者の間（素材間をも含む）の尊卑・優劣・利害・親疎等の関係に応じて変化する言語形式である」と規定している。これは、石坂氏が「国語学辞典」において「敬語」を規定した「同一の対象または同類の対象の言語表現が、話し手・聞き手および第三者の間の尊卑・優劣・親疎の関係によって、その形を異にする言語慣習。ことに敬意を含めた言語表現。」の内容と比較するとき、殆ど差異は認めがたい。なお、石坂氏は同書において、待遇表現については、「言語表現に影響する、かような人間関係を話し手の立場から待遇関係と言い、これに応ずる話し手の言語的態度を待遇・言語待遇と言い、その言語表現を待遇表現と言う。」と規定している。辻村氏の考えが、大まかに見て敬語＝待遇表現であるのに対して、石坂氏のそれは、敬語という大ワクの中に在って、話し手の立場からする人間関係把握の言語表現として考えられている。もっとも、辻村氏は、その後「国語学研究事典」の「待遇表現」の項において、「言語表現を行うに当って、表現主体が、自分自身・表現の相手・話題の人物のそれぞれの間に、上下親疎など、どのような関係があるかを認定し、それを表現形式の上に反映させること、また、その表現。表現主体の、人的関係についての把握の仕方、つまり待遇意識が

言語表現に現れたものなので待遇表現という。」と記述し、石坂氏の考えに同調している。いま「敬語」と「待遇表現」のいずれが上位包括概念かを論ずる要はない。「敬語」という日常語が研究上の厳密な概念規定を、どうしても曖昧にすることを注意すれば足りるのである。

石坂氏は、つぎで「待遇表現の社会的基体的なものが待遇語であり、待遇語に法則的なものが認められれば待遇法である。したがって言語ないし言語表現には対象を意味する、いわば実質的意義のほかに、人的関係に応ずる待遇的意義がある。敬語は軽卑語・尊大語・親愛語などとともに待遇語の一部をなすものであるが、このうち軽卑語（軽蔑語・卑罵語）は非社会的で、多く修辭的・語彙的なものととまり、文法的には発達していない。尊大語は一種の倒錯した敬語というべく、親愛語はそれ自体の領域もあるが、一般的に敬卑に即した表現をとるもので、待遇語ないし待遇法の根幹は、敬語ないし敬語法にあると言うべきである。」と記している。辻村氏も、敬語が敬語表現、待遇語が待遇表現となっている程度の差で、同じ内容の記述を行っている。

待遇表現が、表現主体における人間関係把握の仕方、すなわち待遇意識の言語への反映であるとする見方は、最近ではほぼ定着したものと見てよいであろう¹⁾。そして、待遇表現の諸相として、石坂氏の示すごとく、敬語表現・軽卑表現・尊大表現・親愛表現などが存することも否定しがたい実態である。このように概念規定に

* 昭和53年9月16日受理

当っては、ほぼ等質に併記されながら、実質的研究面では、敬語表現・親愛表現が大きく前進しているのに反して、特に卑罵表現が、ほとんど取り上げられて来なかったのは、それが、石坂氏の言うように「非社会的で、多く修辭的・語彙的なものにとどまり、文法的には発達していない」ためなのであろうか。この小論においては、狂言に見られる卑罵表現の一用法を、その待遇意識の面から考察し検討を加えてみたいと思うのである。

〔一〕狂言「岡太夫」の用例

狂言に「岡太夫」という曲目がある。まず、その本文を、「続狂言記 巻三」¹⁾のそれによって示す。

一 岡 太 夫 髻

△シウト 罷出たる者ハ。此当りの者でござる。けふハ最上吉日でござるに依而。髻殿の御出なされふと有。まづ太郎くハじやをよび出し。申付ふ。やい△太郎くハじや有か △太郎くハはあ。御前にをります △シウト 汝をよび出すこと。別のことでない。けふハ最上吉日なれば。髻殿の御出なさるゝはづじや程に。きれいに払除をせ。御出なら此方へ申せ △太 畏てござるに依而。△シテムコ しうとにいとしかるゝ。花髻でござる。けふハ最上吉日でござるほどに。髻入を致さふと存る。先いそいで参らふ 道行 誠に髻入といふハ。はれな物で。人が見たがと申。定而。垣からも。まどからも。目斗でござらふ。やあ参る程に。是じや。先案内を申さふ。物も。あんないも △太 表に案内が有。あんないとハどなたでござるぞ △ムコ 是ハこれのはなむこがまいったと申せ △太 畏てござる申々髻殿の御出でござる △シウト こなたへ通らせられと申せ △太 心得ました。中々。こなたへお通り被成ませ △ムコ 心得た。ぶあんないにござる △シウト やあ。よふこそ御出被成た。待かねました △ムコ されば△。そうそう参りませふ所に。何かといたして。をそなへりました。其段は。是のお娘 子にめんじて。御免なされ

△シウト いやいや。ちつともくるしうござらぬ。太郎くハじや。今の言付てをいた物を出せ △太 畏てござる さんぼうに。わらびもちのせ出す。むこの前にをく也。もちやくろき 絹切にて丸め。ぬひのせをく也 △シウト さあ△これをまいれ △ムコ 是ハむまそふな物でござる。さらばたべませふもちを取くふていする ふところへいるゝ也 扱も△むまい物でござる。是ハ何と申物でござる △シウト 是ハわらびもちと申物でござるが。延喜の帝の。御てうあひ被成たによって。官を被下て。わらびもちを。岡大夫共申ます。則朗詠の詩にも。のつてござる △ムコ 扱も△。むまい物でござる。もひとつたべませふ △シウト やい△太郎くハじや。も一つしんぜ △太 いやもはやござりませぬ △シウト はて扱残多ござるもはやないと申。御帰り被成たら。此仕様を。おなあが存てゐます。こしらへさしてまいれ △シテ 私ハない物ハたべませぬ。夫ならかへりまして。宿でたべませふ。最早こふ参ります △シウト ござるか。何の御馳走もなふて。残多ござる。さらば△△。よふござった △ムコ はあ。なふ△うれしや。△。まんまと。髻入すました 道行 先急でかへつて。今のもちをたべませふ。はや是じや。なふ△おなあ。今かへったハ △女 やあはや帰らせられたか。はよふござった △ムコ されば△。しうと殿も。きげんかよふて。馳走にあふた。それに付。何やらめづらしい物をふるまへれたハ △女 夫ハ何でござった △ムコ はあ何やらであったが。藤大夫とやらいはれたが。らうしにもものって有といはれた △女 いや△。夫ハ朗詠の詩のことでござらふ △ムコ それ△。夫をくハふ △女 是ハくハるゝ物でござらぬ。わらハが。一つ二つ覚えてゐます。いひませふ程に。其内に有なら。有と仰られ △ムコ 心得た。いふてきかしやれ △女 鶏既鳴忠臣待旦²⁾。あしたとハ。かいじやう時。若かいのすざい。とつさかのりばしまいったか △ムコ いや△其様な物でもなかったハ △女 氣鬻風梳新柳髪。氷消波洗旧苔鬚。ひげにて思ひ出した。若ところばしまいったか △ムコ いや△ところハ。をれも知てゐるが。夫でもない △女 池凍東頭

風度解。窓梅北面雪封寒。梅にて思ひ出した。
 もし。梅^{ばし}ばし。まいったか △ムコ なふ<す
 やの<聞さへすい。それでもおりやらぬ △
 女 こしゆかいのそこには。なつとうのいさごを
 しくとハ。納豆をさかなにして。酒ばしくらふ
 たか △ムコ 酒ばしくらふたかとハ。わらで作
 てもおとこじやに。くらふたかとハ。どうした
 ことじや。をのれきかぬぞ。ぶつてをいたがよ
 い。あゝはらたちや △女 なふ<。はらたち
 や<。したゝか。わらハが手をぶった。扱も
 いたや<。まことにしじんのものうさハ。
 わらび一手をとるといふが。此ことであらふ。
 なふ<いたい事哉 △ムコ やあ<。いまの
 ハ何といふたぞ。も一度いふてきかしやれ △
 女 なんじや。も一度いへ。しじんのものうさ
 ハ。わらび一手をとるといふことしや △ムコ
 それ<。わらびでおもひ出したハ。わらひも
 ちのことじや △女 何とわらびもちと仰ら
 るゝか。それハ。わらハが仕様^{しやう}を知てゐます。
 こしらへてしんぜふぞ △ムコ なふ<うれし
 や<。むまい物じやはよふこしらへてたもれ。
 くいたふてならぬ △女 心得ました。やすいこ
 とじや。こちへござれ< △ムコ うれしいこ
 とじや。わごりよハ。りはつな人じや。なまな
 がひ事を。よふ覚ていやる。今のちやうちやく
 したハ。かんにんさしませ △女 何が扱。かん
 にんせいでなりませふか。きづかひめさるな
 △ムコ なふ<。いとしや<こちへおりやれ
 < 女をおほて
はいる也

この狂言「岡太夫」の登場人物は、舅・舅・女
 の三人である。場面は、舅が舅を訪れる舅入
 の場面と、舅入をすませた舅が自宅に帰り妻と
 相対する家庭の場面との二つである。登場人物
 は三人であるが、対話として現われるのは、三
 者相互ではなく、舅↔舅、舅↔女の二種の
 組み合わせのみである。この二種類の対話の組
 み合わせにおける人間関係（待遇意識の基礎）
 は、一般的にみて次のように考えられよう¹⁶⁴。

〈舅↔舅〉 社会的身分の上下関係は、一般

的には言えない。個々の具体相においては必ず
 生ずる人間関係であるが、この狂言にあっても
 身分上の関係は不明である。次いで年令上の関
 係としては、恐らく、一般的に舅が舅に比して
 上位に在るであろう。さらに親疎の関係は、一
 般的には論じ得ないものであり、具体的にこの
 狂言について見ても、この関係は明確ではない。
 全くの初対面なのか、舅・舅という関係を持っ
 て後の初会見なのかも明らかではない。たゞ、
 女を媒介として、他人に比して一定度以上の親
 愛の情を持っているであろうことは確かであろ
 う。最後に、社交上・儀礼上の関係であるが、
 一般的に見て、舅・舅の人間関係としては、こ
 の要素が最も大きな比重を占めるのではなかろ
 うか。それぞれに自己の品格を保ち、他からの
 考慮を十分に考えた待遇意識が、もっとも強く
 働いているものと考えられる。

〈舅↔女〉 実質は、夫・妻の人間関係であ
 る。封建的体制の強化浸透の過程にあった当時
 として、男子上位の家庭習慣が出来上りつつ
 あったことは、当然考えられよう。もっとも、
 その家に付随する身分が、士農工商の何れに属
 するかによっては、家庭習慣としての夫上位の
 在り方は異なるであろうが、一般的な男尊女卑
 の思想は中世から近世にかけて強化されてお
 り、とくに家主としての夫と、その妻との関係
 においては顕著であったと考えることが出来よ
 う。つまり、身分的上下関係に類する関係が存
 したと考えることが出来よう。次いで年令的な
 問題はここでは特に取り上げる要はないようで
 ある。親愛関係については、夫婦が愛情を基礎
 とする近代と異なり、封建社会におけるそれは、
 必ずしも親愛関係が最も重要な条件をなすもの
 とは考えられてはいなかったであろう。然しな
 がら、夫・妻の人間関係が現存する事態をふま
 えて、その両者の待遇意識を考察する場合には、
 たとえ、愛情が憎悪に変ずる折があり、犬も喰
 わぬ争いが頻発するにせよ、両者の間に「愛情
 にからむ意識」が存することは認めざるを得な
 いであろう。最後に、社交的・儀礼の関係であ

るが、家中心の当時の社会にあっては、この要素は強く、先述の親愛関係との区別が仲々判別し難い様相を示すのが一般的である。決して、それは近代における冷たい夫婦間のそれではなく、逆に社交的・儀礼的關係の内部に、継時的に親愛關係が醸成されてゆく過程が、よく見られるのである。

以上のように、この狂言に登場する人物の人間関係を、一般的に把握しながら、上記「岡太夫」本文に~~~~線を付した語・「飲食スル」動作を表わす語を、ここでは特にとりあげてみたいと思う。それは、聲↔女の對話の中で、突如として、女の夫に対する「くらふ」の使用から聲が激怒するところに注目したからである。この狂言にあっては、「飲食スル」動作を表わす語が16例用いられている。いま、これを次のように三つの群に分けて考えて見たい。

A 聲入の場 (男↔聲)

- 1 これをまいれ (男→聲)
- 2 さらばたばませふ (聲→男)
- 3 もひとつたばませふ (聲→男)
- 4 こしらへさしてまいれ (男→聲)
- 5 ない物はたばませぬ (聲→男)
- 6 宿でたばませふ (聲→男)
- 7 今のもちをたばませふ (聲 独白)

B 家庭の場 (聲↔女)

- 8 それ<夫をくはふ (聲→女)
- 9 是はくはるゝ物でござらぬ (女→聲)
- 10 とつさかのりばしまいったか (女→聲)
- 11 ところばしまいったか (女→聲)
- 12 梅干ばしまいったか (女→聲)

C 激怒の場面 (聲↔女)

- 13 酒ばしくらふたか (女→聲)
- 14 酒ばしくらふたかとハ。わらで作ってもおとこじゃに。 (聲→女)
- 15 くらふたかとハ。どうしたことじゃ。をのれきかぬぞ。ぶってをいたがよい。あゝはらたちや (聲→女)
- 16 くだいたふてならぬ (聲→女)

A群は男→聲の「まいる」2例と、聲→男の

「たべる」4例と、聲の独白「たべる」1例であり、いずれも動作の主体は聲である。

B群は聲↔女の「くふ」2例と、女→聲の「まいる」3例であり、「くふ」の1例(9)が動作主体を特定しない外は、いずれも動作の主体は聲である。

C群は、これを同場面のB群から分離したのは、上述のごとく、「くらふ」という語を、女が聲に対して使用したところから、聲が激怒する場面を迎えるからである。ここには「くらふ」3例と「くふ」1例がある。14・15の2例は13における女→聲の用法を、そのまま引用した用法であり、動作の主体は特定されないが、実質的には13の用法をそのまま受け継ぐものと見ることが出来よう。13・16の動作主体は、いずれも聲である。

ここで、「続狂言記」所収の本文を基に検討してきたのであるが、狂言各流の台本について実体を少し検討してみたい。「狂言記」が、いずれの流派にも属せず、どちらかといえば、「ヨミモノ」的性格が強いのに対して、各流派の伝える台本は、まさしく演劇台本としての性格を持つものであり、その間に異同が見られるとすれば、そこに或は、登場人物の人間關係の差異も見られ、待遇意識の実質を捉えるたよりともなるであろうと考えるからである。

I-1 大蔵流 虎明本¹⁵

A群

- 1 さらはそれをまいれと云時に (二行書)
- 2 とりてくふ (")
- 3 一口くひて (")
- 4 一口づつくふて (")
- 5 クフマ子也 (")
- 6 さてくひすましてから (")
- 7 さらハ今一つたべたひ (聲→男)
- 8 いやそれならはたばまひ (")
- 9 めづらしひものをくふた (聲 独白)
- 10 こしらへさせてたべふ (")

B群

- 11 なふそれをくはふ (聲→女)

- 12 させてくへといはれた (")
 13 らうゑいをくはふ (")
 14 それはくふ物でハござらぬ (女→髻)
 15 そのうちにあるものくハふ (髻→女)
 16 梅干やまいったか (女→髻)
 17 ところをばしまいったか (")
 18 とつさかのりばしまいったか (女→髻)
 19 しろいめしやまいったか (")
 20 ふだんくふめしを (髻→女、二行書)
C群
 21 よきさけやくらふたか (女→髻)
 22 くらふたか、いや言語道断の事じゃ、男
 といふものハ、箸に目鼻つけた物でもそ
 のやうにハいハぬ、人にハつかふことば
 が有、くらふたか (髻→女)
 23 わがくふた物の (女→髻)

I-2 大蔵流 虎寛本・安田蔵本¹⁶

- A群**
 1 青梅を好て給ます (髻→舅)
 2 ちとまいりませい (舅→髻)
 3 是を給ますか (髻→舅)
 4 夫成らば給ませう (")
 5 終に給た事が御ざらぬ (")
 6 かへてまいりませい (舅→髻)
 7 無い物は給ませぬ (髻→舅)
 8 こしらへさせてまいりませい (舅→髻)
 9 こしらへさせて給ませう (髻→舅)
B群
 10 めづらしい物は参りませぬか (女→髻)
 11 こしらへて喰さしめ (髻→女)
 12 喰ふ物では御座らぬが (女→髻)
 13 梅干ばしまいったか (")
 14 ところばし参たか (")
 15 鶏冠海苔ばしまいったか (")
 16 白いめしばし参たか (")
 17 朝夕喰ふ飯を (髻→女)
C群
 18 よい酒ばしくらふたか (女→髻)
 19 何じゃ、喰らふたか (髻→女)

- 20 藁でたばねてもをとこは男じゃに、をつ
 とに向ふて喰らふたかといふ事が有物か
 (")
 21 喰ふた物を忘るゝといふ事が有物で御ざ
 るか (女→髻)

II-1 和泉流 狂言六義(天理本)¹⁷

- A群**
 1 むこくう様子をして (叙 述)
 2 今少たへたい (髻→舅)
 3 ない物はたべぬホトニ (")
 4 これかまいりたくハ (舅→髻)
 5 させてまいれ (")
B群
 6 れうりせいくわふ (髻→女)
 7 なにかこしめしたいそ (女→髻)
 8 れうりヲさせてくへといわれた(髻→女)
 9 そのらうゑいをくわふ (")
 10 くわるゝ物でハなひ (女→髻)
 11 とさかのりをおまいつタカ (")
 12 むめ干をおまいったか (")
 13 ところはしおくやツタカ (")
 14 わが口にくふた物さへわするゝ (")
C群
 15 古さけをたんとくらふタカ (女→髻)
 (おとこ はらをたてゝ 大かたおとこに
 云ことはかある物しや はしに目はなを
 付ても おとこハ男であるに にくいや
 つしやと云テ おいまわす)

II-2 和泉流 六義・三宅本¹⁸

- A群**
 1 髻取テクウテイシテ (叙 述)
 2 ミナクウタルテイヲスル (")
 3 今少たへたい (髻→舅)
 4 ないものは給ませぬ (")
 5 ついにまいらぬか (舅→髻)
 6 是がまいりたくは (")
 7 させて参れ (")
 8 追付させて給う (髻→舅)

B群

- 9 料理さしませ くはう (髯→女)
 10 色々料理かあってまいったと (女→髯)
 11 仰られたか 何か参りたいぞ (〃)
 12 料理をさせてくへといわれた (髯→女)
 13 其らうゑいをくわう (〃)
 14 くわるゝものでは御ざらぬ (女→髯)
 15 とさかのりをまいったか (〃)
 16 梅干をおまいったか (〃)
 17 ところをおくやったか (〃)
 18 くらうた物を忘るゝと云事か (〃)

C群

- 19 古酒などをくらうたか (女→髯)
 20 大方男には云詞か有 料理をせぬのみならず 女の口からくらうたかとは にくい事をぬかす (髯→女)
 21 くらうたかと云か それ程腹の立事か (女→髯)

Ⅲ—1 鷺流 森藤左衛門本¹⁴⁹

A群

- 1 それを参りませい (舅→髯)
 2 左様ならば喰べませう (髯→舅)
 3 先づ参りませい (舅→髯)
 4 餅手に取り喰ふ (叙述)
 5 但喰方心得あり (〃)
 6 無いものは喰べぬよ (髯→舅)
 7 只今喰べた物の名は (〃)
 8 早う戻って拵へさせて喰べう (髯 独白)

B群

- 9 珍しい物を喰べたワ (髯→女)
 10 廊下で喰へとやら (〃)
 11 その朗詠を喰べた (〃)
 12 朗詠と申すものはまいるものではござらぬ (女→髯)
 13 鶏冠海苔ばしお参りやったか (〃)
 14 梅ぼしを参ると聞きましたが (〃)
 15 野老ばしおまいりやったか (〃)
 16 しろきおだいをおまいりやったか (〃)

- 17 朝夕喰ふ物が珍しいか (髯→女)

C群

- 18 よい古酒をくらうたか (女→髯)
 19 何ぢゃ くらうたか (髯→女)
 20 男に向ってくらうたかと、己その様の推参な事を言うたならば打出いてのけうぞ (髯→女)

以上、狂言三流派の主要台本について、曲目「岡太夫」中の「飲食スル」動作を表わす語をとりあげてみた。一覧すれば次の如くである。

A群(舅↔髯)では、

舅→髯 まいる

髯→舅 たぶ(る)

叙述・独白 くふ

B群(髯↔女)では、

髯→女 くふ(Ⅲ—1に たぶ)

女→髯 まいる・こしめす・おまいる・おくやる・お参りやる・くふ

C群(女↔髯)では、

女→髯 くらふ・くふ

さきに記したごとく、待遇意識の基礎となる人間関係を想起しながら、これらの用語を検討してみようと思う。A群は、各流派台本にわたって、全く異同はない。舅→髯の「まいる」は髯の動作であり、髯→舅の「たぶ(る)」と同様である。相手に対する敬意表現としての「まいる」と、自己謙譲の表現としての「たぶ(る)」は、みごとに図式通りの用法である。叙述にみられる「くふ」は、待遇意識を持たない普通表現として考えられていたかと考えられる。B群では、女→髯に用いられる「まいる・こしめす・おまいる・おくやる・お参りやる」が敬意表現である点については、各台本共通である。これらの語相互に、どの程度の敬意の差異があるかは、単に「おー」や「ーやる」といった語構成の要素によって判断しかねる問題である。こゝでは、女→髯・髯→女に用いられた「くふ」について考えてみたい。同じ用法は、次のC群にもⅠ—1、Ⅰ—2において見られるのである。これ

らの動作主体は、すべて聲であり、聲→女の用例としては、尊大・卑下・親愛などの特別な待遇意識を持たないものとして、前記A群のそれと同様に考えられるであろう。しかし、女→聲の用例については直ちに同様であると判断することは出来ない。各台本の用例を見ると、I-1・2では、女が聲へ「くらふ」という語を吐きかけ、聲が立腹し問詰するのに対して、女も「やら そなたはきこえぬ、わがくふた物のなさへわすれて、何事をいハします」と腹を立てる。またII-1・2では、朗詠の詩をあれこれと言わされ、「女房はらをたてゝ、・わか口にくふた物さへ わするゝと云事がある物かと云テ」その直後に、聲に向って「くらふ」という語を投げつけるのである。流派の違いで、前後はするが、聲に対する女の腹立たしさの高まりの中で用いられている点は共通していると見てよいであろう。このことは、ここに至るまでの女→聲の用語は「まいる」を始めとする敬意表現を用いる点では、各台本共通していることを思うとき、少くとも「くふ」が「まいる」に対して大きな格差をもつことを示していると考えられる。ついでC群では「くらふ」という語を女が聲に使用することでは、各台本はすべて共通であり、さらに天理本「狂言六義」・「六義」の「抜書」にも朗詠の詩句と共に、「……ところをおまいったか。……古酒などをくらうたか。」と、肝心の語は銘記している。この「くらふ」を投げつけられた聲は激怒するが、その時の言葉が各様に見られる。

I-1 いや言語道断の事じゃ、男といふものハ、箸に目鼻つけた物でもそのやうにはいハぬ、人にハつかふことば有

I-2 薬でたばねてもをとこは男じゃに、をっとう向ふて喰らふたかといふ事が有物か

II-1 大かたおとこに云ことはかある物しやはしに目はなを付てもおとこは男であるににくいやつしや

II-2 大方男には云詞か有、料理をせぬのみならず、女の口からくらうたかとはにくい

事をぬかす

III-1 男に向ってくらうたかと、己その様の推参な事を言うたならば打出いてのけうぞ是等の用例から考えられることは、「くらふ」という語は、人・男・夫に対して女・妻が使うべきものではないという待遇上の意識が存在することである。もっとも、「狂言六義」(II-1)に「其時はらをたてゝ大方さむらひにハつかふことばがある物じゃ、こちの事かやいとぬかす、りぐわいものじゃ、打てくれう」と、大名が相手の言葉とがめをする際の表現が見られるが、各流派この曲目を存しながら、他の台本にはこの表現は見られない。内容から見て、当然通用する性質のものでありながら、各流派の台本に存しないのは、まだ当時一般社会の通念として、このような認識が確立していなかったのか、或は逆に、あまりにも当然すぎて、科白としての面白味に欠けるために早く消滅したものか、いずれとも断じがたい。こゝでは同類の表現形式が他にも使用されている一例として採ったに過ぎないのである。

狂言「岡太夫」における「飲食スル」動作を表わす語について、各流派台本にわたって見てきたのであるが、登場人物相互の待遇意識をふまえて、まとめて見ると次のように考えられる。

- 敬意——まいる・おまいる・お参りやる・おくやる・こしめす(男・女→聲)
- 謙譲——たぶ(る) (聲→男)
- 無待遇——くふ (叙述・夫→妻)
- 怒りの感情——くふ (妻→夫)
- 卑罵——くらふ (妻→夫)

これらの語は、「くふ」の一部を除いて、人物間の待遇意識を正確にしかも規則的に反映していると見ることが出来よう。辻村氏は「敬語の史的研究」の末尾の付録「敬語変遷一覧表」の中で、「まゐる・おまゐる・こしめす」を上位主体語、「たぶ(る)」を下位主体語、「たべる」を美化語として掲げている。敬意・謙譲の表現に付いては、これまでも多くの研究があるので、無待遇・卑罵の両表現について、いましばらく

検討してみたい。

狂言曲目「どんごんさう」には「飲食スル」動作が頻出する。大蔵流虎清本¹⁰においては、冠者が主の動作を「まいる」3例、「こしめす」1例と表現し、冠者が自身の動作を「たぶる」5例と用いている。さらに、主が冠者の動作を「くらふ」7例と表現している用例は、怒りと罵りの感情の強い会話である。「くふ」11例は、主が冠者の動作を表現したもの、主が自身の動作を表現したもの各1例を除けば、他は動作主体の不明確な一般的抽象的表現の例である。又和泉流狂言六義においては、「くらふ」の例はなく、冠者が主の動作を表現した「きこしめす」1例、「まいる」2例と、冠者が自身の動作を表現した「たぶる」3例がある。「くふ」は叙述部分の2例の外、主が冠者の動作を表現したものの3例、主が自身の動作を表現したものの1例、動作主体不明確なもの1例と、やゝ雑多な用法を見せている。

次いで、曲目・台本について広く「くらふ」の用例を見れば、固定化した表現と考えられるものとして次の三種がある。

- 1 牛にくらはれだまされた(たらされた)
鍋八撥(虎明本・虎寛本・大系本¹¹) 文蔵(虎明本) 附子(虎明本) 朝比奈(虎明本・虎寛本・大系本) 瓜盗人(大系本)
- 2 いけらふ一期かぶりくらはん
餅酒 (天正本・虎明本・虎寛本・大系本・賢通本¹²・森本)
- 3 いでくらはう
清水(虎明本・虎寛本・大系本・賢通本・森本)
伯母が酒(虎明本・虎寛本・大系本・賢通本・傳右衛門本)¹³ 首引(虎明本・虎寛本) 抜殻(虎明本・虎寛本) 柿山伏(虎寛本・大系本)
鎧(虎寛本) 鬼の継子(虎寛本)

上記以外では、天正本の「犬引ざとう」1、虎明本の「青海苔」2「饅頭」1、大系本の「鱸包丁」1「禰宜山伏」1「文蔵」2「附子」1、賢通本の「素袍落」1、森本の「素袍落」1「悪太郎」1「文蔵」1 などが見られるが用いら

れる場面は、いずれも怒りや罵りの感情の強いところであり、概して身分関係では上位から下位に対して用いられているといえよう。一方、「くふ」の用例は、「飲食スル」動体を表わす語として最も多く、その用例は、前述の「岡太夫」「どんごんさう」に同じく、特に待遇意識を持たない場合か、或は弱くともそれが感ぜられる場合においても特定の方向性を見出すことは困難である。「くふ」を無待遇とし「くらふ」を卑罵語と考えた所以である。少くとも狂言台本においては、このことが認められるのではないかと考える。

〔二〕「くふ」と「くらふ」について

「くふ」と「くらふ」は「飲食スル」意味を中心に重なりが多いと考えられる。国立国語研究所報告28「類義語の研究」において、①意味の方面 ②語感の方面 ③語の形態の方面 ④語の文法機能・品詞性に関する方面 ⑤語の存在様式に関する方面に分けて研究調査を行っている。きわめて妥当な見解といえよう。いま、「くふ」と「くらふ」について見るとき、③④⑤はあえて問う要はあるまい。②に関しては、さらに ④語感的な差異 ⑤言語使用者の好み・選択 ⑥類義語の使用意識の三点から検討している。これらの点については、前章において、「狂言」台本を素材として、一応の検討を加えた。ここでは、①意味の方面について検討を進めることにしたい。

まず、小学館発行の「日本国語大辞典」について、両者の記載をみよう¹⁴。(用例は省く)

○くう

- 1 唇や歯で軽くはさんで支える。くわえる。
- 2 強く歯を立ててかむ。かみつく。
- 3 これと思ったものにしっかりととりつく。
- 4 かんだり飲んだりして口から中へ入れる。
- 5 しめつける。間にはさむ。1・2の転。
- 6 生計をたてる。暮らす。
- 7 身に受ける。くらう。

- 8 うかつに信じる。だまされる。
- 9 相手を負かす。
- 10 ばかにする。
- 11 他の領分を犯す。
- 12 金や時間を必要とする。
- 13 相当の年令になる。

14 カットする。(俳優仲間の語)

補, 4, 6の場合, 現在では, 上位の者から下位の者が物をいただくの意から転じた「たべる」の方が上品な言い方として多く使われている。7の場合は, 俗語的な「くらう」を使うことも多い。

○くらう

- 1 飲み食いする。食べる。食う。
- 2 生活する。くらす。
- 3 身に受ける。こうむる。
- 4 むさぼる。
- 5 追放される。

「くう」14項目「くらう」5項目の意味の分化の差は, 両者の使用範囲の広狭を, 常識的に示しているようである。「くう」の4と「くらう」の1, 「くう」の2・3と「くらう」の6・7が同質の意味内容を持つことがわかる。前者が「飲食スル」動作であり, 後者はそれから転じた, やゝ概念化された用法である。「くう」の1・2は「くわえる」「かむ」動作であり, 「飲食スル」動作の前段部分と共通ではあるが, それ自体独立しうるものであり, この用法は「くらう」にはない。「くう」の3・5は, この1・2の具体的動作が, やゝ概念化され状態性を帯びて用いられるに至ったものであろう。また「くらう」の4・5は, 各1・3からの転であり, 「くう」の8は7からの, 9・10・11は2・5からの, 12・13は6からの転であらうと考えられる。なお, 「くう」の補注の記載は, 待遇意識の問題として注目されるが, これとよく似た記載は「大言海」に「今ハキタナキ物言ヒトス」(くらふの項), 「大日本国語辞典」に「今は多く罵るに用ふ」(くらふの項)と見えている。以上を, 現在という時点における両語に付いての知識の概要

と見て, 以下若干の検討を加えよう。一応, 11世紀をもって区切り^{注15}, それ以前を「上代」と呼び, 以後を「近代」と呼び, 「狂言」の時期までの両語の変移を概観することとする。

一上 代一

まず「時代別国語大辞典 上代篇」によれば^{注16},

〔くふ〕

① 噛む。くわえる。歯で噛み合わせて持つ。

噛みつく。例 万葉集・古事記・書紀等

② 食う。たべる。例 古事記・万葉集等,

考 ハムに対してクフは, もと歯でくわえる意であり, それがかんで咀嚼するところから食べるの意に移ってきたものであろう。

〔くらふ〕

飲み食いする。たべる。例 霊異記・新撰字鏡

〔くらひもの〕

飲食物。例 霊異記・書紀等

〔はむ〕

食べる。例 万葉集・霊異記・書紀等

考 ハムは噛んで飲みこむことをいい, 口にくわえることを原義とするクフとは異なるといわれる。

ここでは, ハムとクウの違いが注記されているが, 「くふ」と「くらふ」については特に記されていない。しかし, その記述から見て, 「くふ」にクワエルの意が示され(原義として)「くらふ」には是がない点と, 「くらふ」の意として「飲」の内容を含めている点と, さらに用例として示されたものに, 「くふ」には万葉集が挙げられているが「くらふ」にはない点などが注目される。第一点は, 「くひもち」の例が多いことや, 新撰字鏡のクヒがカムと併記されることの多い点などから推定されよう。第二点は霊異記の用例が「飲食の中にヨキクラヒモノがある」とするものであることや, 新撰字鏡のクラフがハムと併記されることの多い点などによるものかと思われる。第三点は, 万葉集は「くふ」4例のみで「く

らふ」は存せず、古事記には両者の用例が存し、日本書紀訓読例や新撰字鏡などにも両者が存することから、或は和文系統には「くふ」、漢文訓読系統には「くふ」「くらふ」の併用ということも考えられるようである。ついで、和歌、物語・日記、訓点資料等の各分野について見てゆくことにする。

和歌集の方面は¹⁷、古今集・後撰集・拾遺集をはじめ、貫之歌集・好忠集など家集を含めて「くふ」「くらふ」の用例は見られない。

物語・日記の方面では、竹取・伊勢に 2・3 例の「くふ」が見え、「薬くふ」（竹取）も見られるが、「くらふ」は見られない。土佐日記には「くふ」3 例と「くらふ」1 例が見える。「くらふ」は、かじとりの「おのれしさをくらひつれば、はやくいなんとて」という動作の描字に表われる。大和 7・平仲 2・蜻蛉 10・宇津保 0・落窪 10 と「くふ」の用例があるが、「くらふ」は見えない。枕草子には 20 例の「くふ」を見るが「くらふ」はない。源氏物語には 14 例の「くふ」があり、「爪くふ」などカム意の用法や「枝をくふ」クワエル意の用法が見える。又「目くはす」や「くひあつ」「くひぬらす」等の複合語も用いられるが、「くらふ」はない。和泉式部日記・紫式部日記には、両者の用例は見られない。浜松中納言・更級に「くふ」が僅かに見えるが、提中納言・寐覚には両者とも見えない。物語・日記類には、土佐日記に「くらふ」が 1 例存するのみのようである。

訓点資料の面では¹⁸、成実論天長五年点に「嗜クラハム」が見えるのをはじめ、百法頭幽抄古点に「喫クラヒ」が見える。法華經玄賛淳祐古点では「齧クヒ」「嚙クラフ」両例が見え、法華經義疏長保四年点に「食クヒ」が存する。観智院本・世俗諺文には「クフ」は見られず、「舗・食クラフ」が見られる。大慈恩寺三蔵法師傳古点には「クフ」は見られず、「食クラフ」が 7 例見られる。西大寺本金光明最勝王經古点にも「餌クラフ」が見えるが「クフ」はない。

以上、11 世紀末までの状況を概観して見たわ

けであるが、予期した如く、和文系文献には「くらふ」が表われず、訓読系文献には「くふ」「くらふ」両語が見られるが、どちらかと言えば「くらふ」が優勢のようである。辞書の面では両形が存し、その用いられる漢字に一定の傾向が見られる。ただ、土佐日記に例外的に「くらふ」1 例が見られることは、既に知られる「しむ」の用法とともに興味あることである。

ついで、12 世紀から 17 世紀前半までを概観することにする。

——近 代——

まず、和歌集の方面は、後拾遺・金葉・詞花をはじめ新統古今に至る歌集には、前代同様に用例は見られない。歌合集も同様であるが、連歌では最も日常語が多いと見られる犬筑波¹⁹（古活字本）において「くふ」15 例「くらふ」1 例が見られ、「くらふ」の用法は、「蚊にくらはれにけれ」というものである。同本の異本である檀王法林寺本 俳諧連歌（天正初期）では「くふ」3 例しか見られない。また、同様の性格かと見られる歌謡の面では、梁塵秘抄に「くふ」5 例が見えるが、「くらふ」は存せず、閑吟集にあっても「くふ」2 例のみである。

物語類の方面は、日記・擬古・仏教説話・戦記・縁起というように性格を異にする分野があり、それぞれに分けて見てゆくことにする。

日記・擬古物語では、讃岐典侍日記・多武峯少将・篁物語などに「くふ」の例が見えるが、「くらふ」は見られない。なよ竹物語・十六夜日記には両例とも見られない。仏教説話集では、いろいろな表われ方を示している。今昔物語では各巻ごとに、この二語の表われ方に差が見られる。たとえば、巻三・巻五・巻二七などは、「クフ」に比して「クラフ」が多用され、巻十一・巻二四などでは「クフ」がやや多い。巻三十などは「クフ」14 例に対して「クラフ」0 という対比を見せるものもある。概して「クフ」に「薬クフ」が多く、他には「カム」意の用法が多い。打聞集には「くふ」のみ 19 例みえる。

古本説話集では、「くふ」が圧倒的に多いが、「くらふ」も2例存する。宇治拾遺にあっては「くふ」「くひもの」が圧倒的に多い中に、「くらふ」が5例見られる。古事談・続古事談¹²⁰には、「くふ」のみ、各数例みえるのみである。沙石集¹²¹においては、圧倒的に「クフ」が用いられる中に「クラフ」が数例用いられている。

戦記類では、平家物語に「くふ」が数例みえるが、「くらふ」は見られない。太平記では「くふ」と「くらふ」が、ほぼよく似た状態で用いられているが、前半に「くふ」の多用が目立つようである。曾我物語・義経記には「くふ」が少数見えるのみで、「くらふ」は見えないようである。縁起の類は、信貴山縁起・北野天神縁起など数種を検討したが、両語ともに見られなかった。

随筆の類については、無名草子には両語とも存しない。方丈記においても「くひもの」を除いて、両語の用法は見られない。徒然草には、「くふ」27例の用例が見られる中で、ただ1例「くらふ」が存する。「猫またといふものありて人をくらふなる」というところである。

一方、訓点資料の面では¹²²、大唐西域記長寛年点には「食クフ」「啗・餐クラフ」「差クラヒモノ」と、両語の使用例が見られ、俱舎論音義にも「齧クフ」「舐・喰クラフ」の両者の用例が見られる。しかし、正法眼蔵では「食クラフ」2例のみであり、韻字集は「舗クラフ」、宝鑑朱点は「嚼・食・敢・喫クラフ」、秦中吟延慶書写加点本は「食クラフ」のみと、いずれもクラフは存するが、クフは見当らない。足利本仮名書き法華経にあっては、「くふ」はなく、「くらふ」のみ2例が用いられている。

辞書について見れば、色葉字類抄には、「食クフ・クラフ」外24字が両訓を添えて掲げられており、口を部首とするもの13、食をもつもの7、歯を含むもの4となっている。世俗字類抄では、天理本「食クラウ」外5字、(口4、食2)とあり、赤須本「嚙クウ・クワヘテ」外1字と「食クラフ」外1字を掲載している。類聚名義抄で

は、図書寮本には両訓とも見えず、観智院本では「咀クフ」外23字(口10、歯9、食4)「咬クラフ」外31字(口16、食12、歯2)となっており、「クフ」「クラフ」で共通しない字はそれぞれ、24字中16字、32字中23字となっており、別語としての意識が強いように思われる。三宝類聚名義抄では、「食・喰」は両訓を付しているが、「舗」以下8字は「クラフ」のみであり、「飲」以下3字は「クフ」のみの状態であり、やはり、別語という意識が見られる。下学集¹²³においては、榊原本のみが「食クフ」と「食・啖クラウ」の両語の例をもち、亀田本・春林本・前田本など「啖・食・咬クラフ」のみである。撮壤集には「食クフ」「齧クラフ」の両者が見える。文明本節用集は、「食クフ」は2例にとどまるが、「食クラフ」(外3字)の用法はおびただしいものがある。明応本は「クフ」はなく、「喫クラウ」のみである。運歩色葉集では「啖クフ」と「食・喰クラフ」の両者が存する。黒本本に「クイキル」の語が割注に見えるが項目の付訓にはなく、項目としては「食クラウ」などに見える。その外、古本節用集の類(伊京集・天正本・饅頭屋本・枳園本・正宗本・温故知新書・易林本)は、いずれも「クラフ」のみが見られ「クフ」は見られない。塵芥にも「クフ」はなく、「クラフ」5字が掲げられている。

抄物の分野では¹²⁴、史記抄に「クウ」23例ほかに「クイシバル・クイサス」などの複合語数例があり、「クラウ」20例ほかに「クライイル」が見え、両者同等の用法を見せている。蒙求抄では、「クウ」単独の用例は見られぬが、「クイアウ」ほか10語の複合語が見られ、「クラウ」は8例存する。四河入海抄では、「クウ」は「巢クフ」「ヒトハラクフ」くらいしか見えぬが、「イタツラクイ」ほか10数個の複合語が見え、「クラウ」は3例あり、ほかに「カミクラウ」ほか数個の複合語が存する。毛詩抄においては、両者とも単独の用法はないが、「カブリクウ」・「カミクラウ」など複合語が見られる。中華若木詩抄には、「クラウ」2例が見え、「クウ」と読む

であろう「食」が3例見られる。東国抄物¹⁸²⁵では、巨海代抄に「クウ」「クラウ」が各1例見えるが、「クウ」は「巢ヲクウ」の例である。他に「酒ハ食ムト」「鹿食喫ソ」「生キ者ヲ食フテ」などの例が見られる。報恩録に、「喫クワンゾ」1つが振仮名を付しており、他はすべて、食・喰など漢字用法で判別しがたい。なお、食ス・喫スなど音読の例も見える。無門関抄(B本)には、「喰クロウ」1例が見え、「クエ」6例が存するが、うち5例は「ノメクエ起テ居ヨ」の形をとり成句と思われる。

キリシタン資料に関しては次のようである。ドチリナ・キリシタンでは、「くう」「くらう」とも1例であるが、「くう」は「くすりをのみくう」であり、「くらう」は「虎・狼がくらひつく」という用例である。金句集には「くらふ」は見えず、「食ふ」3例である。伊曾保物語では、「くう」9例、「くらふ」28例、ほかに「食ひ切る」など複合語が10例余、「シヨクス・タブル・ハム」が若干存在する。ギヤ・ド・ベカドル字集では、「くう」は見られず、「喰くらふ」が2例存する。拉葡日対訳辞書¹⁸²⁶では、「くう」が27例、ほかに「食い違う」など複合語が17語用いられているが、「くらう」は僅か1例である。ロドリゲス日本大文典にあっては、「くふ」4例に対して、「くらふ」は6例を掲げている。パヂェスの日仏辞書には次のように記されている。

Coui, coui, couita クイ, クフ, クフタ, *manger* // **Mordre** // *Être bien ençâssée, ou encastrée une pièce de bois dans une autre, ou dans un trou, etc. (*しっかりととはめ込むこと, 或は他の部分の中又は穴の中に木片をはめ込むこと)

Courai, rō, rōta クライ, ラウ, ラウタ, *manger* (*en parlant des personnes viles ou des animaux) // **Mordre**. *Inouni tewo courawarourou*, イヌニテヲクラワルム, être mordu à la main par un chien. (*下賤な人達がおしゃべりしながら, 或はけものたちが——食べる)

この外に、クイアヒ・クイアキ・クイボリ・クイカブリ・クイカエシ・クイカエリ・クイシバリ・クイシメシ・クイコロシ・クイハナレ・クイハタシ・クイイリ・クイキリ・クイノコシ・クイヌキ・クイサキ・クイチガヒ・クイチガエ・クイトメ・クイトヲシ・クイツクシ・クイツギ・クイツメ・クイヤブリ・また、クライコロシ・クライハタシ・クライキリ・クライモノ・クライツキ といった複合語が見られる。項目として挙げられた「クウ」「クラウ」に対する訳語としては、両者ともに *manger* と *mordre* とが使用される。前者は「食う・たべる」意であり、後者は「噛む・挟む・くい入る」意である。注目すべきは、「クラウ」における注の中の *viles* の語である。意味は「賤しい・下位の」といったものであるが、原著の日葡辞書における当所の該当語は *baixas* となっており、同じく「下の・下賤の」の意味をもつ語である。「クラウ」に対して、「下賤の人間たちが、おしゃべりしながら食べる」と述べている点が興味あるところである。この語が、下賤の者たちが用いる語であるというのではなく、下賤の者が話しながら(行儀わるく)食べる状態を表現する語であると言っているのである。そこには、当然、下位者に対する蔑視の意識が存在したと考えられるのである。落葉集では、「食くらふ」が存し、その中の色葉字集や小玉篇にも「食・喰くらふ」が見られる。

以上、11世紀末を区切りとして、上代と近代とに分けて、「くふ」と「くらふ」の在り様を16世紀末まで検討してきた。紙数のこともあり詳細にすべての用例を掲げて考察することは不可能であり、記述も粗雑になってしまった。また、訓点資料や抄物の分野は、そのすべてを検討することが出来ないのは止むをえないとしても、採り上げた文献資料がはたして適当なものであったかどうかについては、まことに心許ない次第である。たまたま手にする便宜を得たものに限られたというべきであろう。これらの欠点を覚悟の上で、ここで極めて巨視的な要約と、

問題点の整理を行ってみたいと考える。

- (1) 和歌・連歌・歌謡の分野。此種の語自体が素材として思わしくないのであろうか、「くふ」「くらふ」ともに全く見られないか、あったとしても少数である。16世紀に入り、俗語の使用の多い「犬筑波」に1例「くらふ」が見られるのが注目される。「万葉集」に用いられた「くふ」が、以後の勅撰集・家集などに見られなくなったのは、歌謡として思わしくないという語感を与えられたのであろうか。歌謡としては「梁塵秘抄」や「閑吟集」に「くふ」は用いられているのである。
- (2) 物語・説話・随筆の分野。まず仮名文を用いた10世紀から13世紀に至る物語・日記の類は、「くふ」を主体として用いており、その意味の分化も広い。この中にあって、ただ「土佐日記」にのみ「くらふ」が1例見られる。或は、訓点語（男性語・日常語）の世界から、思わず洩れ用いられたものであろうかとも考えられる。助辞の小書きという文体を持ち、訓読系との関係が強く見られる「今昔物語集」には「くふ」と「くらふ」が同等の比重で使用されている。もっとも巻によってその用法に片寄りが見られる点は、さらに他の問題とも併せて考える必要があると思う。これと性質の相似する「打聞集」に「くふ」のみが用いられていることも、なお究明の要があろう。おなじ仏教説話集であるが、文体面からみて、仮名文の物語に近いと見られる「古本説話集」「宇治拾遺物語」「古事談」「続古事談」などが、「くふ」の使用が多く、「くらふ」が少ないのは、それなりにうなずけよう。「沙石集」には、漢文や経文の訓読部分が多く見られるが、文体それ自体は、やはり仮名文を主体としているようであるが、「くふ」と「くらふ」の表われ方を見ても同様のことが言えるようである。戦記の類では、「平家物語」に「くふ」の少数例が存するのみであったのは意外であるが、流布本のみを対象としたことによるものか、或は叙述そのものの内容によるものか

判断が付きかねる。さらに真名本系や「源平闘諍録」「四部合戦状」などとも併せ考えるべきであろう。14世期の「太平記」に「くらふ」が比較的多く使用されることを思えば、この分野のより詳細な調査が必要と考えられる。随筆の分野では「徒然草」に「くらふ」が1例見える。「猫また」という異常な物についての噂として記された特異な場面とはいえ、あえて此語を用いた意図は考えなければならない。「くふ」の動作主体が動物である故とは考えられず（狐・犬・馬→くふの例あり）、「虫 脳をはむ」1例も見られる。やはり14世紀半ばという時代の所以か、俗語として故意に用いたか、或は人の言をそのままに記したか、いずれとも断じがたい。

- (3) 訓点資料・抄物の分野。9世紀から14世紀半ばまで数多くの資料が存するが、大体において言えば「クフ」「クラフ」が併用されている。ただ詳細な検討を加えなければ言えないことであるが、これまで見た範囲で考えれば、11世紀と13世紀以降とは「クラフ」が優勢のように見受けられる。訓点の世界では、かならずしも「クフ」と「クラフ」は意味上の差異が明らかでない。もし存すれば若干の待遇上の違いか、語感の差であろうと思われるが定かではない。なお、「仮名書き法華経」は、女性の読誦の便をはかって、仮名文に読み下したものであるが、これにも「くらふ」のみが用いられていることは、注目すべきである。15世紀に存する抄物においても、両語の使用は同様である。わずかに単独用法として「クラフ」が多く、「クフ」は複合語として分化している傾向が見られる程度の差はあるようである。
- (4) 辞書の分野。「色葉字類抄」には見られない点であるが、「類聚名義抄」では、「クフ」と「クラフ」は別語と意識され、それに用いる漢字には比較的大きな差違があったと考えられる。この差違はおそらくは経典の訓読の際の実相を反映しているものと考えられる。ま

た15世紀後半に入っの「下学集」や「節用集」の類では、明らかに「クラフ」が優勢である。これは、訓点資料の傾向や、「徒然草」「太平記」に「くらふ」が登場することと無関係ではないであろう。

- (5) キリシタン資料の分野。16世紀末に集中する此種のものは、当時の口頭語を反映するものと見なされている。総体的に「くふ」「くらふ」の両語が用いられているが、「拉葡日辞典」を除けば、「くらふ」が優勢と考えられる。「拉葡日辞典」の用例は各項目に付された説明部分の日本語であるから、或は、より口語的であるかも知れないが、「伊曾保物語」の実体などと比較すれば、かならずしもそうとはいえない。この中で、最も注目すべきものは、「日仏辞書(日葡辞書)」の記載である。前述の如く、「くらふ」に対して、「下賤の人間たちが、おしゃべりしながら食べること」と記している。そこには明らかに「くらふ」という語を用いる際の待遇意識が存するのである。此種の待遇表現について、詳細な観察を以て記された、ロドリゲスの「日本大文典」に記載がないことは注意すべきことではあるが、狂言「岡太夫」の例に見られる事実と呼応して、当時存在したことは疑いのないところであろう。

以下、17世紀以降の「くふ」「くらふ」について、若干ふれておく。「三河物語」には「くふ」が数例見られるが「くらふ」はない。「捷解新語」では「くふ」1例のみである。「雑兵物語」は、「くう」4例、「くひもの」2例、「くらふ」14例と特色がある。身分賤しい者の言としての配慮があったものか、実状がそうであったものか、ただし、罵りや怒りの感情は全く見られない。西鶴作品では「世間胸算用」「織留」「置土産」「俗つれづれ」「文反古」「武家義理物語」などでは「くふ」のみが見え、「永代蔵(喰ひ詰)」「二十不孝(喰^{かぶり}喰^{くら}ふ)」「懷硯(食^{くら}ふ)」「新可笑記(喰^{くら}ほどの)」などの僅かな例を見る。「奥の

細道」には「くふ」1例のみである。「洒落本」では「くう」「くらふ」は同様に使用されるようである。その中、序文・地の文(漢文調)に「くらふ」がよく用いられ、また「飲食スル」意としては、「大飯喫」「大酒くらい」「大喰」など熟語となるものと、「女をくらう(買う)」「異見をくらう」「あじにくらう」など動作を受ける意の用法が目立つようである。「東海道中膝栗毛」では、慣用句「くそをくらへ」が目立ち、ついで、馬子の言葉や喧嘩・罵言の用法が多い。最後に、ヘボンの「和英語林集成」では、「クフ」「クラフ」「ハム」「タベル」を相互に同義語として項目をあげている。「安愚楽鍋」における「くう」・「たべる」の多用と、「くらう」の限られた用法を、併せ見るとき、19世紀後半の様相を一応うかがうことができよう。

おわりに

最初に、待遇表現が全体として非常に研究が進展しながら、その一翼をなす卑罵表現の研究が進まない現状に対して、石坂氏の言うごとく、それは「非社会的で、多く修辭的・語彙的なものにとどまり、文法的には発達していない」という認識に疑問を提出し、ついで狂言「岡太夫」に見える「くらふ」を採り上げて検討を加えてきたのである。そこでは、妻から夫への「くらふ」の使用が、決して其の場限りの一回的人間関係によるものではなく、腹立ち・怒りの高潮によって、社会的に用うべからざる言辭を遂に用いてしまったという状況が見てとれるのである。つまり感情の高まりが、社会的制約(言語としてのきまり)を突き破った事態が見られる。それが演劇としての狂言曲目の中心点として描かれているということは、まさに、そのことが社会的に存在し認識されていたと言えよう。「くらふ」が妻から夫へ用いてはならないという社会通念が、はたしてどのようにして生じたのかを知る手だとして、無待遇と考えられる「くふ」との比較において、両者の語誌のあらましを、ついで検討してきた。この点に限ってみれば、

「日葡辞書」の記載が唯一のものであるが、当時の日本語に詳細な観察を加えたクリシタンの注意を惹いた事実であったことは確かであろう。ながい歴史の中で、種々起伏はあるものの、概して言えば、「くふ」が仮名文主体の物語・日記・随筆の世界に主として用いられ、一方、「くらふ」は漢文訓読文の影響の強い世界に保たれてきている。ただ、16世紀後半以降は、かならずしもこの傾向だけとは考えられず、異なった表われを見せるようであるが、いまだ確かなことは言いえない。或は東国語・江戸語としての面があるのではないかとも考えられるが、これも積極的な資料は得られなかった。また、当時から、文献や資料の上で表面に浮上してきた庶民（貴族・僧侶・武士以外の）の言語生活の一面が反映するものと考えるのが妥当かも知れない。

狂言に見られたような、感情の高まりが思わずにして卑罵表現を採らしめた場面（特に卑罵語の使用）の問題は、これまであまり問題として採り上げられては来なかった。ただ、敬意表現が欠除するという側面としては、すでに先覚の諸説がある。たとえば、「源氏物語」賢木巻末尾における弘徽殿女御の描写に対して、森野氏²⁷は「憤懣の爆発するままにあらぬ言動にはしる、ヒステリカルな姿を、敬語を用いない、むきだしの言及のし方をその人物の発話内に採らせることによって描写するという手法をとることがある」と解説している。感情の起伏によって敬語が取捨されることに注目し、これを採り上げた着眼点は敬服すべきものと思うが、この発想は、いわば敬意表現の存在を前提としたものと言うべきであり、そのあるべき敬意表現のない異常さへの注目であるという意味において問題を含むのではなからうか。敬意表現が特に取り出され問題とされるのは、通常な、いはば無待遇表現を基盤として始めて可能であるはずであり、もっとも基準となるものの存在が消えてしまえば論自体が消滅する怒れが生ずるのである。しかし、待遇表現はそれぞれの言語の

場に応じて様相を変えるものであり、待遇表現の基準は、具体的な言語の場へのぞむ人間関係が規定するものであるという考え方も出来よう。たしかにそのような面もあると思うが、もし基本的に待遇表現の基準規定が具体的な言語の場によって左右されるのであるとするならば、それは非社会的なものであり、言語法則ということではできないであろう。ある場面に登場せしめる人間相互の問題にせよ、これを描字書記する作者にせよ、これを読む人間にせよ、この社会的規範（ことばのきまり）の外に在ることは許されないはずである。或は、また、敬意表現こそが基準であったと仮定するならば、それを欠く表現の特異性を、より一般的に（たとえば自然描写や展開のための叙述など）解明しなければならないであろう。

この間の問題について、辻村氏²⁸はあたらし

く「○お取りになる——取る——取りやがる

○おっしゃる ——言う——ぬかす

○行く ——いらっしゃる——うせる

という例をあげて、これらはいずれも

敬語——通常語——卑罵語 という対応

をなしており、素材待遇の表現においては、

敬——常——卑 と、敬——常のみとがあり、対象待遇の表現においては、敬常のみが存在するのである。従って、敬語は常に先ず通常語との対応において存在し、卑罵語とは通常語を隔てて対応するものと言うことができる」と論じている。おそらく、待遇表現に基準としての通常語を正しく意識し位置づけたものと言えよう。これまで、一般的に第一例に類する要素の探索は行われて来たが、第二第三例に示されたような要素についての研究は少なかったと言わざるを得ない。まず、語彙的に探求が広げられ、さらに進んで語法的な呼応にまで進むことが求められるのではなからうか。この小論でも、これを所期したのではあるが、結果的には語彙的な指摘に止まったことは心残りである。

最後に、第二章の語誌的調査の材料は、伊藤信一、小川智恵子・永原恵美・柳内恵美子の諸君と共に国語学演習の過程で得たものを補訂したものであることを付記する。

注1 「敬語史論考」石坂正蔵・「国語待遇表現体系の研究」山崎久之・「敬語講座1～10」・「講座国語史5」・「敬語と敬語意識」国立国語研究所など。

注2 架蔵本、元禄十三年版文化七年再版による。

注3 漢詩三句の振仮名は省略した。

注4 「岩波講座日本語4」所収辻村敏樹「敬語の構造と種類」・「講座国語史5」所収森野宗明「待遇意識の諸相」など参照。

注5 笹野堅「古本能狂言」による。

注6 虎寛本は岩波文庫による。安田蔵本としたのは幸田露伴の手になる「狂言全集」三冊本に附載されたものをいう。この曲目については両者は殆ど同文と見てよい。

注7 天理図書館善本叢書「狂言六義」上下抜書による。

注8 三宅本は「狂言三百番集」所収のものをさす。両本は、此曲目については、殆ど同文である。

注9 「謡曲文庫第八巻 狂言篇上巻」所収のものによる。

注10 わんや刊「狂言古本二種」所収による。

注11 岩波書店の日本古典文学大系「狂言集」上下をいう。

注12 朝日新聞社の日本古典全書「狂言集」上中下所収のものによる。

注13 注9に同じ。

注14 説明は最少限に省略し、用例はすべて省いた。

注15 「講座国語史5」所収、辻村敏樹「敬語史と時代区画」参照。

注16 用例は省略した。

注17 歌集・物語・日記は、すべて索引のあるものは、それによった。

注18 訓点資料については、「金光明最勝王経古点の国語学的研究」「大慈恩慈三藏法師伝古点の国語学的研究」「正法眼蔵の国語学的研究」などの外、「訓点語の研究」「訓点語と訓点資料」「平安時代の漢文訓読語についての研究」「平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究」所収の資料、さらに雑誌「訓点語と訓点資料」所収のものなどを使用した。

注19 福井久蔵「犬筑波集研究と諸本」による。

注20 両書とも、近世初頭書写本（渡辺綱也氏蔵）による。

注21 貞享版による。

注22 注18に同じ。

注23 「古本下学集七種総合索引」による。以下の節用集に至る辞書は、それぞれの索引による。

注24 史記抄・蒙求抄・四河入海抄・毛詩抄 は「抄物資料集成」別巻索引による。

注25 駒沢大学文学部国文学研究室編の「禪門抄物叢刊」による。

注26 金沢大学法文学部国文学研究室編の「ラホ日辞典の日本語」索引編による。

注27 「講座国語史5」所収 第三章「古代の敬語II」——感情の起伏と敬語の取捨。

注28 「敬語と非敬語—敬語研究の問題点—」国語と国文学53巻10号。

補注 「訓点語と訓点資料61」に宇都宮氏の手になる「神田本 白氏文集 天永四年点」総索引が発表された。これによると、クフはなく、クラフが6例、ハムが3例見えている。